

第十部会

キリスト教とグローカリゼーション

——南インドを事例にして——

岡 光 信 子

キリスト教は、西アジアの一地方に発祥したが、現在、さまざまな地域に広がっており、所謂「世界宗教」の一つとされている。宗教が国家や民族の枠を超えて広がるという現象は、宗教のグローバル化として捉えられる。また、地域を超えたアイデンティティをもつ宗教が特定地域の文化に根を下ろす現象は、宗教の土着化またはローカル化とも言えよう。グローバル化にローカル化の現象が同時に随伴する過程であるから、宗教についても「グローカリゼーション」という言葉が適応可能である。このことは、宗教に理念的で普遍的な側面に加え実践的で地域的な適応を伴う側面があるということを教えている。

インドにおいて、ヒンドゥー教がインド固有の支配的宗教であるのに対し、キリスト教は外来的かつ少数派の宗教である。インドにおけるカトリック教会は、教会としての普遍性を保ちながら、儀礼の中に地域的要素を採り入れるなど宣教地の文化に歩み寄る形で存在している。特に、第二バチカン公会議以降、カトリック教会は、宣教が行われる各国の社会・文化的な事情に譲歩を示し、典礼秘跡省の定めた諸規則を遵守するかぎ

りにおいて、各地域の教会がその典礼に土地の習慣や伝統の採用を認める方針を打ちだしている。

本発表の目的は、聖体と呼ばれるカトリックの宗教儀礼が南インド・タミルナドゥ州のK教区でどのように実践されているかに焦点を絞り、そこに見られるヒンドゥー教起源の儀礼要素を検証し、宗教のグローカリゼーションの問題について考察を行うことである。

聖体は、タミル語で「新しい善行」を意味する「ブドウ・ナシマイ」と呼ばれる。K教区では、初聖体拝領を十二歳前後に行い、初聖体の儀礼は、各小教区に存在するそれぞれの教会に祀られている守護の聖人にちなんだ祝日と併せて行われる。

初聖体の儀礼には、アーラッティというインド文化に根ざした行為および要素が採り入れられている。アーラッティは、本来はヒンドゥー教に由来する儀礼行為として汎インド的に見られるものである。K教区においてアーラッティが観察されるのは、ミサを構成する「感謝の典礼」の中で、司祭がタミル語で栄唱を唱える時である。初聖体拝領予定者の女子三人が、直径二十センチほどの皿を手に祭壇の前に立ち、それぞれが①花、②花と線香、③花と線香とろうそく、を載せた皿を両手で持ちながら、皿を頭の上で右回りに三回転させる「アーラッティ」を行う。それらは順に、シングル・アーラッティ、ダブル・アーラッティ、トリプル・アーラッティと呼ばれている。

カトリックの宗教儀礼の中にヒンドゥー教起源の儀礼が組み込まれる現象は、宗教のグローカリゼーションの一例と捉えることが可能である。第二バチカン公会議以降、現地社会特有の

第10 部会

要素をカトリック教会の正式な宗教儀礼である典礼に採用することが認可されたことはすでに述べた。さらに、教皇庁は、一九六九年、インドのカトリック教会に対して『十二ヶ条の声明』を示し、典礼の中にインド固有の文化要素と儀礼要素を採用することを公認している。教皇庁の声明は、宣教地において必然的に付随する多様性や相違をインドの特殊事情にも照らして重ねて保証したことになる。

インドのカトリック教会は、ドミナントな土着文化に歩み寄り、それを典礼や組織の構造の中に採り入れ、ヒンドゥー文化に辿り得る諸要素を反映した独自の典礼を模索してきた。しかし、典礼の中に見られるインド的諸要素は、ヒンドゥー教の宗教的・儀礼的文脈から切り離され、キリスト教の儀礼の式次第に則って再編されている。つまり、ヒンドゥーの儀礼要素は、脱ヒンドゥー化というプロセスを経た後に、キリスト教的な意味づけを付与されて典礼の中に組み込まれているのである。

ビシュワスという信じ方

——ネパールのキリスト教における信念——

丹羽 充

二〇〇六年まで世界唯一のヒンドゥ王国であったネパールには、現在キリスト教（主にプロテスタント諸派）が急速に浸透している。人口に占めるキリスト教徒の割合は二〇〇八年時点

で、実に四％から八％にまで上るといふ見解すらある。しかしながら、だからといってネパールにおいてキリスト教が市民権を獲得し得ているというわけでもない。一九六〇年代から行われたキリスト教徒に対する法的抑圧が終焉した現在でも、キリスト教徒に対する社会的抑圧は依然として根強く続いているのである。

ネパールのキリスト教についてはこれまで、実証的な学術研究はほとんどなされていないものの、宣教師の報告やそれを基にした文献研究が少なからず蓄積されてきた。その中でキリスト教に対する社会的抑圧、ことさら親族関係による抑圧は非常に頻繁に指摘される事柄である。特に宣教師の報告では、ネパールのキリスト教徒をエンパワーするような、すなわち親族集団による抑圧に耐えるキリスト教徒を賞揚するような護経論的なものが大変多く書かれてきた。

だが、それにもかかわらず、実際にキリスト教に対して親族関係によるどのような抑圧があるのか、その背後にどのような論理があるのかという点についての説明は殆どなされていない。そこで本発表では、親族関係がキリスト教の展開に対してどのような影響を与えているのか、またそれがどのような論理に裏打ちされているのかという点を明らかにしていく。その上で、親族関係による複雑な規制の中で、キリスト教徒であること、さらにキリスト教徒として「信じる」ということが、ネパールの人々にとってどのようなことなのかということに焦点を当てていく。

事例としては、カトマンドゥ盆地ラリトプル地区の離村、